
魔女と弟子と傭兵と

猫小判

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔女と弟子と傭兵と

【Nコード】

N3545B

【作者名】

猫小判

【あらすじ】

魔女とその弟子、そして傭兵はドラゴンと遭遇した。頼みの魔女は杖が無く、役立たず。頼りない半人前魔女の弟子と実績の無い傭兵は、やむなく二人だけでドラゴンと戦うことに……。

（前書き）

この作品はテーマファンタジー企画の作品です。他の作者様の素敵な作品は「魔法小説」で検索すると読むことができます。

「師匠、彼に任せるなんて無茶です！」

肌に痛い風が吹き荒び、辺り一面が白に覆われた、高山の山頂近くの開けた台地。そこでわたしは岩の陰から、体長六メートルはあるドラゴンと剣一本で対峙している少年を指差して、同じく物陰からドラゴンを見ている師匠に抗議の声を上げる。

師匠は至極困った表情でわたしの肩を掴んだ。

「だから、無理だつて言つてんでしょ！？ あたしは杖を忘れたの！ 杖を忘れた魔女なんて荷物持ちにもならないつて教えたでしょ！！」

「はい、今日ここに来てから教わりました。重いものを持つのがしんどいから荷物持ちは嫌だ、つてわざと杖を忘れての、都合の良い言い訳でしたよね？」

「う……」

魔女様はあからさまに顔をしかめて、明後日の方向に目を向けた。

私の師匠である魔女様はこういう人だ。いつも些細なことで楽ししたがって、簡単に済むはずの事態を空前絶後の厄介事に発展させてしまうのだ。これが無意識のうちに起こるつて言うのだから始末が悪い。思えば、今回の事の全ての始まりは朝だった。

朝、わたしはいつものように店のカウンターで頼杖をついていた。

この店の商品は、カウンターの隣で怪しく光る水晶のドクロ、壺に満ちる紫色の液体、ホルマリンで満たされた瓶に入っている目玉といった怪しさ爆発の不気味なアイテムの数々だけ。店長であるわたしの師匠によると、全て高価な魔法アイテムらしいのだけれど、見習いのわたしにはよく分からない。

とにもかくにも常人には理解し難い店だということ。

つまりは、そんな店に客が来るはずもなく、わたしは暇を持て余している。

「はぁ……、師匠は商売のセンスが無いのよねえ……。今の御時世、魔法を本気で究めようって人間なんて少ないのに……」

隣の地区の魔女様は方針転換して、魔法実験の材料ではなく加工後の製品を販売し始めて、それが大成功。この街でも有数の巨大量販店に成長した。それに比べてこの店は、魔法使いが実験にさえ使わないような希少な珍アイテムしか扱ってないから、家計はいつも火の車。潰れないのが不思議にさえ思う。

わたしは深く、深くため息をついた。

「弟子入りすると間違えたかも……」

わたしが割と本気で師匠を変えようかと考えていると、扉が開いたことを知らせるベルの音が耳に届いた。同時に店内へと入って来る人影。

わたしはその顔を確認して、もう一度大きくため息をついた。

「なんだ、クロードか」

「なんだとはなんだよ、レナ」

背の高い黒髪の青年、クロードはカウンターの前に無造作に置かれている椅子に腰を下ろした。

あ、そうそう。レナっていうのはわたしの名前。背が低くて、栗色の髪を三つ編みにした、どこか垢抜けてない女の子。それがわたし。

わたしはしつしつと手を払った。

「だって、クロードはいつも世間話ばかりで、何も買っていないんだもん。営業妨害よ。帰って」

「営業妨害って、客なんて誰も居ないじゃないか。それに暇だろ？」
クロードは店内を見回し、呆れたような表情で言った。

……客が一人も居ないのは確かだし、わたしが暇しているのもその通り。

わたしは小さく息をついて、仕方なく上体を起こす。

「しょうがないわね。貴方の世間話はくだらないけど、付き合ってあげるよ」

クロードは呆れたように肩をすくめる。

「うわっ、愛想ねえな」

「まあ、クロードだしね。商品を買ってくれるお客様には愛想を振りまいてるよ？」

「可愛くねえ奴」

クロードは舌打ちして、わたしから商品に視線を移した。わたしに話題なんて無いから、わたしはまた頬杖について商品を見るでもなく、眺め始めた。

沈黙。しかしそれは嫌なものではなく、どちらかということ心地よい……。

「レナっ！ クリスタルコーラル、探しに行くわよ！！」

バン、と蹴破らんばかりに勢い良く扉を開いた女性、つまりは我が師匠によって心地よい静寂は一瞬にして崩壊した。

わたしとクロードはそのままの体勢で硬直。

しかし、それも一瞬。わたしはいつものように苦虫を噛みつぶした時のような表情を浮かべ、クロードは一目散に外を目指して駆け出す。

「ちょうどいいわ。クロード、あんたも来なさい」

が、神速で動いた師匠の右手に襟首を掴まれ、クロードはその場に引き留められた。

「ジュリアさん……。あの、俺は忙しいんで……」

「へえー。こんな人気の無い店でぼけっとレナの顔眺めてるのが忙しいわけだ？」

「ちがつ……！」

「なら暇よね？」

「ぐっ……」

師匠はにんまりと意地の悪い笑みを浮かべ、クロードはぎり、と悔しげに歯軋り。

「……分かりました。ついて行けばいいんでしょう、ついて行けば！」

「そうそう。最初からそうすればいいのよ」

師匠はそうして満足そうに頷いた。

師匠の本名は、ジュリア・ミースレイン。青みかかった黒髪を腰まで伸ばした、女のわたしでも思わず見とれるくらいの美人という表現では失礼な程の超絶美女だ。また、妖しい光を放つ赤い瞳が男を惹きつけてやまないとか。

師匠は壁にかけているロープの中から、いつもの真紅のやつを羽織ってわたし達に号令をかけた。

「じゃあ、五分後に出発よ！各自、遅れないように……！」

「あの、師匠。クリスタルコーラルってどこにあるのですか？」

わたしは一番の疑問を口にした。

クリスタルコーラル。別名、水晶珊瑚。その名の通り、珊瑚のような形をした水晶である。それは特定の洞窟の奥深くで見られ、希少価値がとてつもなく高い代物である。

そんな洞窟がこの街の近辺にあるなんて話、わたしは聞いたことがない。

その間に、師匠はにやりと笑みを浮かべる。

「それは出発してからのお楽しみ」

「師匠、悪いんですが非常に怪しいです」

「だあいじょぶだって！領主からの情報だから……！」

師匠は大丈夫大丈夫と、疑念の視線を向けるわたしの背中をバンバ

ンと叩いた。

クロードに目配せすると、彼は軽く肩をすくめた。『諦める』と。わたしは渋々支度を済ませ、一行はクリスタルコーラル探索に出掛けたのだった。

という経緯でドラゴンと対峙することになってしまった訳だけだ。

師匠は顎に手を当てて何度も首を捻る。

「おつかしーな……。確かにここっていう話だったんだけど……」

まあ、つまりは単純な話、

「騙されたって事じゃないですかっ！ どーするんです！？ わたし、ドラゴンなんて初めて見ましたよ！！」

師匠は狼狽するわたしの両肩に手をのせて、
「頑張つて！ あなたとクロードが力を合わせればなんとかなるわ！！」

そんな、無責任なことを、言い出した。

悪い冗談、と笑い飛ばしたかった。冗談よ、と笑い飛ばして欲しかった。しかし、師匠の目には冗談のかけらも無かった。どうしようもなく本気だった。

わたしは現実味の無い現実を、未だドラゴンとにらみ合っているクロードを見つめた。

「……分かりました。クロードの援護に行ってきます」

「うわあ、格好良いよレナ。給料上げちゃう！」

「生きて帰れたら……、の話ですけどね」

そんな軽口を叩いて、わたしは杖を構えて物陰から飛び出した。

「クロード！ 援護するわ！！」

「ばっ……！！」

いきなり現れたわたしに気付くドラゴン。

威嚇するかのような咆哮。そして飛翔。

その動きはずんぐりとした見た目とは裏腹に素早く、戦闘経験のないわたしは全く反応出来ない。

あ、死んだ。

ドラゴンの鋭い牙がわたしを喰い千切らんと迫る様が、酷く緩慢に見えた。わたしは動けない。ただ、ごく近くに死が迫っている割には、心は不思議と穏やかだった。

わたしは諦めて、緩慢な世界でゆっくりと瞼を下ろす。
衝撃。

しかしそれはドラゴンの牙がわたしに食いついたような激痛ではなく、誰かがわたしを突き飛ばしたくらいのもの。

同時に上がる金属と金属がぶつかり合ったような甲高い音。瞼を上げると、そこにはドラゴンの牙を剣で受け止めるクロードの姿があった。

「馬鹿ッ！ 早く退がれ！」

「う、うん！」

わたしはすぐさま立ち上がり、クロードの後方に走る。

咆哮。

クロードの舌打ち。

大地を挟む音。

その全てを無視して安全圏へと飛び込み、ようやく振り返った。

その視線の先、クロードとドラゴンは激戦を繰り広げていた。

クロードはすばしこく飛び回り剣を振るう。しかし、それは必ず甲高い音と共に鱗に弾かれ、クロードを丸太のようなドラゴンの腕が襲う。が、そこには既にクロードの姿は無く、また何処からか甲高い音が響く。

わたしはぐっと杖を握りしめ、その闘いに見入っていた。戦局は圧倒的にクロードに優位。わたしが手を出す必要もなく、いや手を

出せるだけの実力が無かった。

「こりやまずいね……。そろそろ死ぬよ、あいつ」

いつの間にか隣に立っていた師匠は、小さく舌打ちをした。

「えっ？ どうしてですか？ あんなに押してるのに……」

「あの剣、多分もう駄目よ。直に折れるわ。クロードはそれなりに強いけど、武具に金をかけないのが玉にきず、ね」

「それなら、早く援護しなきゃ……！」

わたしは杖を正面に構えて目を閉じた。思い浮かべるのは赤々と燃え盛る炎。少しずつ、少しずつイメージを固めて……、

「待ちなさい。ただでさえ半人前なんだから、闇雲に魔法を使っても意味は無いわ」

師匠の、いつもの楽天的な雰囲気とは違う、威圧的な言葉にわたしはびくりと背筋を伸ばした。

師匠は続けてクロードに檄を飛ばす。

「クロード！ ドラゴンの腹には鱗が無いわ！ レナがドラゴンを怯ませるから、斬りつけるんじゃなく突き刺しなさい！」

相も変わらずドラゴンの周りを飛び回っては剣を弾かっていたクロードは、微かながら確かに頷いた。

「レナ、あなたはドラゴンの頭の辺りに炎の魔法を使いなさい。特に目を狙って」

「は、はい！ 分かりました……！」

わたしは力強く頷いて瞼を閉じた。先ほどと同じように炎のイメージを瞼の裏に生み出す。それを空想から現実組み直す行程、呪文をばそぼそと呟いた。

それらの手順を踏んで、全ての準備の終了と共に目を見開く。発動地点をドラゴンの頭部に固定。

わたしは発動の言葉を高らかに叫んだ。

「全てを燃やしつくす深紅の炎よ、彼のドラゴンを焼き尽くせー！」

一瞬の後、突然とドラゴンの目の前に上がる炎。

ドラゴンは炎から逃れるように上体を起こして立ち上がり、叫び声に似た咆哮を上げた。

「でかした、レナ！」

クロードは自身が焦げるのも厭わず炎の向こうへ、剣を突き出し飛び込んだ。

ずぶり、と。そんな音が炎の向こうから聞こえ、炎より紅い水たまりが急速に広がっていく。

ドラゴンは断末魔の叫びと共に、力無く地に伏せた。

「やつ……た……」

わたしは杖を抱いてぺたんとその場に座り込んだ。腰が抜けたらしくて、どうにも脚に力が入らない。

そんなわたしの頭をぽんぽん、と華奢な手が叩く。

「やったじゃん、レナ。これでまた一人前に近付いたね」

「師匠」。師匠が杖さえ忘持ってくれば楽勝だったじゃないですかあゝ」

「減らず口は一人前ね……」

師匠は呆れたようにため息をつく。

「レナの言うとおりですよ、ジュリアさん。どうして俺が血まみれにならなきゃならないんだか……」

そう言つて黒煙の向こうから現れたクロードは、頭の頂上から爪先まで見事に赤黒く染まっていた。右手に握られた剣は半ばから折れ、どうみてもドラゴンを倒した英雄というよりもどこかの体を張った大道芸人といった感じだった。

わたしと師匠は顔を見合わせて、どちらからともなく声を上げて笑い出す。

「あはははは！ クロードっ、ごめんっ」

「くふふふふっ！ クロード、あんた傭兵より大道芸人やった方が儲かるわよ！！」

クロードは血よりも紅く顔を染めた。

「う、うるさいっ！ 笑うな！！」

わたしたち三人は、ついさっきまでドラゴンと戦っていたとは思えない程に、声高く笑い続けたのだった。

後日。わたしはいつものように頬杖をついて師匠の店の店番をしていた。

店には、新たにホルマリン漬けのドラゴンの瞳とドラゴンの牙、ドラゴンの鱗などが並んでいる。

「はあ、暇だわ」

ドラゴンを倒した魔女の店、ということで一時的に沢山の客が足を運び賑やかになった。しかし、商品のあまりの珍奇さに、客足は波が引くように遠退いていき、元の流行らない陰気な店にすぐに逆戻りしてしまっていた。

不意に鳴る、客の到来を知らせるベル。わたしはすぐさま立ち上がり、最近身につけた営業スマイルを顔に貼り付ける。

「いらっしやいま……って、またクロードか」

「また、とは良いご挨拶だな」

「でしょ」

わたしはクロードの嫌みを軽く流して椅子に腰を下ろして、いつもそうしているように頬杖をついた。

クロードはカウンターの前の椅子に腰を下ろし、わたしの顔をまじまじと見、至極真面目な顔でしみじみと言う。

「お前、さっきの顔、マジで気持ち悪かつ……」

「うるさい！」

「ぐおっ！？」

最後まで言い終わる前に拳で黙らせた。確かに薄々感づいていたことだけれど、面と向かつては言われたくない。というか乙女に対して気持ち悪いはどうかと思う。

「で？ 何しに來たの？」

クロードは痛そうに頬をさすりながら口を開く。

「ああ、そうそう。今日はジュリアさんから約束の魔法剣を受け取るうと思つてな」

「ふゝん。師匠なら今日も……」

言い終える前に扉が蹴破られたかのように、否、蹴破られて勢よく開いた。

いつかと似たような展開に嫌な予感を隠せないクロードは、超絶に苦い風邪薬を飲んだような顔をしている。かくいうわたしも似たような表情を浮かべているだろう。

扉を蹴破った張本人は弾んだ声で叫んだ。

「今日はブラックダイヤを探しに行くわよー!!」

今日もまた、師匠は絶好調なのだった……。

――終――

（後書き）

こんばんは。猫小判です。なんというか、とてもありがちな話に仕上がりました。自覚してます。自覚してるから自己嫌悪。まあうん、でもパクリには見えなと思います。多分、恐らく、きっと……。『これパクリだろ馬鹿野郎！』と思った方は是非、一報下さい。ついでに評価なんかも。……厚かましいですね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3545b/>

魔女と弟子と傭兵と

2010年12月10日07時01分発行